

## 二四三五六

伏見論議

伏見 康治

### リンクス・リセウム のルーツを探訪

#### I

伏見はこの3月末ローマに出かけて、あるシンポジウムに参加したが、この機会を利用してリンクス・リセウムの名前の起源である Accademia(Nazionale) dei Lincei を訪問した。案内役はシンポジウムで知り合ったミラノ工科大学の固体物理のGiuseppe Caglioti 教授で、この方の父上Vincenzo Caglioti 教授がアカデミーの会員であったのである。突然の申し込みにもかかわらず、アカデミー側は歓迎してくださり、会長Giuseppe Montalenti ローマ大学名誉教授に面会することができた。81才の長老、遺伝学の大家。「このアカデミーは世界最古のアカデミーであると聞いているが」と問うたところ、「自然科学を主とするアカデミーとしてはそのとおりだ」という答えだった。最も有名な Accademia del Cimento は1657年、イギリスの

Royal Society は1662年に登記されたのに対し、このリンツェイは1603年に4人の若い貴族の署名で発足したのである。歴史と組織を知りたいという私の要求に対し、Raffaello Morghen という人が1971年に書いた英文の歴史書と、会員名簿を含む1985年版年報その他のドキュメントを戴いた。以下は、この史書によるリンツェイの歴史の概略である。

#### II

1603年、弱冠18才のモンチツェリ候Federico Cesiを主唱者かつスポンサーとして、会が組織された。初めは4人で、Cesiの他、その親戚である Anastasio De Filiis伯、ファブリアノの貴族 Francesco Stelluti、そしてオランダの医者 Jan Heck であった。

この若者たちは食欲なまでの知識欲に満ちており、その知識を自然から直接の観察によって得ようとし、数理と物理とを組み立てようとした。この目的のために、学者同士の研究協力を大切にし、互いに研究結果を知らせ合うこと、それぞれの専門知識を仲間へ植え付けること、

世界中の科学文献を漁り集め、各地の有名な学者と交流することなどを、この会の仕事としたのである。福音伝道者の中で一番啓蒙的だとし、てヨハネを守り神に選り、また古代人が物の中までも見通す眼力を持つと考えた山猫 Lynx =Lincei を紋章に選んだ（この紋章を下に掲げておく）。彼らには一種の宗教的、神秘的、ピタゴラス主義的雰囲気があり、在家でいながら修道院にあるような精神で暮し、勉学に徹し、独身主義を貫き、科学研究に対し献身すること、これが創造神の驚異に満ちた業を根本的に理解する道だとしたのである。

しかし、初期のアカデミーは科学研究の具体的な計画を持たなかったため、その能力以上の

雄大な構想に振りまわされる幼稚さを示していた。家族たちは彼らが危険な思想にかぶれているとみなし、Cesiはナポリにやられて世俗的耽楽を嗜む様に仕向けられた。

この様な時代では、4人の内のオランダ人ヤン・ヘックだけが実のある活動をした。彼はヨーロッパ中を旅行し、多くの碩学と知り合いになり、また多くの稀覯書物を入手した。彼が侯爵たちに書き送った手紙が、この時代のアカデミーの活動報告になっている。こういう旅行の費用は全部、ツェジ侯爵が支弁したものである。しかし、ツェジはスポンサー役ばかりでなく、アカデミーの実際上の推進者であった。その仕事の中で一番大切なのは新会員を、いわ



ゆる co-optation (旧会員の投票による新会員の選定) の方法で選び入れていったことであろう。その中に Galileo Galilei がいたのである。

ガリレオが入会したのは1611年の4月で、この時からアカデミーは世間から認められるようになった。その頃ガリレオはもう有名人になっていたのである。1589年、25才の時に彼はピサで数学の講師になり、落下の法則と振子の等周期性を発見している。1592年にはパドアで、彼の師匠の Moletti の跡を継いで講座を得た。そしてユークリッドや、アルマゲストやアリストテレスの機械学や惑星の理論等々を講義していた。しかし彼が特に有名になったのは、1604年から1610年に至る6年間のことで、この間にガリレオは“眼鏡”を使って天体観測を開始しており、天の川とは何か、星雲とは、月の山と海とは、木星の四衛星、太陽黒点、土星の“三重体”(現在の環)等々の発見を続々と行い、神学者の目ではなく、科学者の目で諸天体を眺めたのであった。これにより、宇宙について、物理的実在について、従来とは全く違った視点を持つに至った。

1611年というガリレオの入会の時期は、彼の名声が発頂に達したまさにその時だったのである。1610年、トスカニ公国王コシモ2世はガリレオに「新科学の王子」という称号を与え、ピザ大学特別教授に任命し、偉大なケプレルも彼の天文学上の発見に折紙をつけたのであるが、ガリレオ自身がアカデミー・ディ・リンツェイの会員となることによって、その評価は広く世間にひろまったと見てよい。ガリレオもまたアカデミー会員になったことを誇りとし、署名の

後にリンクスなる語を付け加えるのを習慣とした。“GALILEO GALILEI LINCEUS”と。

1613年刊行の『太陽黒点の歴史と証明』というガリレオの作ったパンフレットは、アカデミーが出した最初の本であった。アカデミーの会員の数も続々とふえ、また組織体制も整っていた。アカデミーは三つの学塾リセウムに分割された。フェデリコ・ツェジのローマ中央塾、フロレンス(つまりはガリレオの)塾、ナポリ塾(これはガリレオと同時に入会したナポリの学者 Giambattista Della Porta のため)。新しい会員について言えば、このアカデミーは新しい科学をとり入れることを目標としたにもかかわらず、文科の学問を軽視することなく、当時の有名な詩人が数多く誘いこまれたのである。

しかしまさに名声の絶頂の時機に、それを脅かす反対派の動きが徐々に始まっていた。既に1611年枢機卿 Bellarmino が、ローマ学院で修行中のイエズイット派の人々に諮問して、ガリレオたちが唱える新しい学説が問題点を含むのではないかと調べるように命令している。この時には別に荒らだつたことにはならなかった。しかしこの頃から、二つの世界観、つまり中世伝来の宗教および学問の体系と、新しい世俗の(アリストテレスとトーマス・アキナスとに束縛されない自由な)そして科学的な体系との間の抗争が始まるのである。

公然とした非難が現れたのは1616年で、ドミニコ派の神父 Caccini と Lorini がコペルニクスの学説を攻撃する文書を刊行した。ガリレオが推す太陽中心説は聖書と矛盾するから、誤りを正させるか、あるいは異端として退けるべき

だとしたのである。

法王庁は、ベラルミーノ枢機相の口を経て、この非難書を採用し、コペルニクスの「仮説」を教えたり弁護してはならないとし、ガリレオに対しては断固としてこの禁制に注意するよう求めたのである。

アカデミーの中で一番高名の会員が譴責処分を受けたことは、会員間の分裂が生じる最初の原因となった。数学者の Luca Valerio がガリレオ反対の側にくみして、脱退届を送ってきた。これを受けて、歴史的会合が召集され、リンセアン（リンクス・アカデミーの会員という意味である）たちは、パレリオの脱退を受け付けないこととし、その様な行動を取ったことを非難し、暫くアカデミーの活動に参加させないこととした。

ガリレオ学説に対するこの様に明確な態度は、その後、会員たちがとった妥協を許さない宣言や声明の中に引き継がれた。これはリンセアンたちがどんなに深く新しい学説を信奉していたか、またそのような学説が宗教界にどんなに重大な問題を提起することになるのかについても充分覚悟していたことを示すものである。昔ながらの哲学的神学的体系がもはや時代遅れのものであることは、彼らには明らかなことであった。そして自然現象を探求するには、実験によって検証されていない先入観をすっかり捨ててかからなければならないことは、リンセアンたちがすべてはっきり主張していたことであった。

有名な数学者 Nicola Antonio Stelliola は、ガリレオの発議によってリンセアンになった人であるが、支配者たちをこう説得するのがよい

のではないかと言い出した。いわく、「科学と宗教との間を裂くようなことをする人々は、どちらにとっても良くない友人である。なぜなら、宗教も科学も元来神聖なものであって、実は合致すべきものなのであるから」。この二つの世界は「神聖」なものという共通原理を持っており、それらはどちらにも与しないものであるから、究極的には一致するものであるが、ただその一致は表面上に現れたあれこれの差異を論じることではなく、もっとずっと深いところで、文化や信仰を動かす基盤に達するところで求められるべきなのである。

リンセアンの中心であるフェデリコ・ツェジ自身はというと、ベラルミーノ枢機相にあてた1618年の長い手紙の中で、自らの新しい認識を述べて次の様に主張している。すなわち、彼自身は心からの真実の篤信者ではあるが、聖書の中に書かれている解釈問題については、ちゃんと記録された事実と人間の知恵を基にすべきことを説き、彼自身のヘブライ語に関する学識を基にした文献学的論議を展開して、天体に関する彼自身の説、宇宙は水晶体的ではなく、透過的であるという説を立て、星の運動の理論と、天は不動でただ星だけが動くとする教会神父たちの考えとを調和させたのだ、と。

ガリレオ自身は、パトロンであったトスカニ公国王の勧めもあって、沈黙を守り、相対的には静穏な、隠遁生活にはいったが、ただ研究だけは続けた。

しかし1618年イエズウィット神父の Orazio Grassi が『天文学論争』を著してプロトレマイオス派とコペルニクス派の論争を復活させた。こ

れに対する返答はガリレオの弟子である Mario Guiducciがしたが、彼に反駁した者に対してはガリレオ自身が著書『Saggiatore (分析)』によって応えた。この本は、1623年に完成し、リンセアン全員の閲読を経て、アカデミーが発刊する用意が整ったところで、Urban VIIが法王に就任した(1623年8月6日)。

ガリレオとその友人たちは新しい法王に大いに期待した。フェデリコ・ツェジは法王と親交があったし、もっとも熱心なリンセアンの一人 Virgino Cesariniは官房長であった……。法王ウルバヌス8世に、アリストテレス派からの反対を否認してもらえる好機であると考えられた。フェデリコ・ツェジの勧めもあって、ガリレオは法王に謁見を許されるよう何段かの手続きを行った。「この良い機会を失っては、もう二度とこんな工合のよいことは起りそうもないので…」とガリレオは1623年10月9日のツェジ宛ての手紙に書いている。

1624年の夏になって会見は確かに実現したが、結果は思わしくなかった。法王はガリレオの人となりについては、尊敬と親愛の情を示したが、コペルニクス学説をひろめることについては何らの進展もなかった。法王は言う、「聖教会はそれを異端として罰しないし、罰しようともしていないが、軽率のそしりは免れない。それが必然的真理であると誰かがやがて説明するかもしれない、などと心配する必要はない」。

ガリレオは学究生活にかえて、「眼鏡」を作った。それはツェジが後にマイクروسコープ(顕微鏡)と名付けたものである。1629年から30年にかけて、彼は名著『世界の二大体系に関する対話』を著すのに熱中していた。その序文

に次のような部分がある。「4日間に渉る会話の中で、世界(=宇宙)に関する二大体系、つまりアトレマイオスとコペルニクスの体系について、それぞれの立場から哲学的ならびに自然科学的根拠に基づく立論を展開してもらう」。

ガリレオは、この本の書き方が仮設的、フィクション的に二大体系を述べているに過ぎないから、もう一ぺん譴責を受けるという事態にはなるまいと考えていたのである。彼はしかしこの対話の中に、彼の研究の最良の成果をすべて収録し、明晰に論断し、厳正な論議を展開し、的を射た表現を使ったのであって、『対話』は今日までイタリア語で書かれた科学的散文の模範とされている。その上、アトレマイオス説を擁護する立場にシンプリツィオなる人物を使ったが、これはいささか不器用で不用心なおしゃべりで、法王自身が使った言葉を言わせているのである。この本はただちに騒動を惹き起し、1633年ガリレオは法王庁に引き出され、1616年の「コペルニクス説は決して教えたり弁護しない」という約束を破ったとして罪を問われた。

裁判の結果は、被告が自説を撤回することと監禁とであったが、実際は自宅閉門ということで済んだ。しかし健康は衰え、盲目となり、1642年に死んだ。

それに先きだつ1630年、アカデミーの中心であったフェデリコ・ツェジは全く突然に亡くなってしまった。ガリレオの断罪とツェジの死とはアカデミーにとって致命的な事件で、それ以後、アカデミーは形骸と化した。アカデミー・ディ・リンツェイの最も華やかな第一期は終わったのである。その間ガリレオの活動がアカデミー

の活動の大部分を占めたが、しかし決してそれだけではなかった。たとえば、ヘルナンデスの探検蒐集資料に基いて、『メキシコ大百科辞典』という部厚い本が刊行されているが、これは新世界の植物を図版で記載したものである。

フェデリコ・ツェジの社会的地位と領地からくる財産とによって、またガリレオの華々しい学才によって、支えられたきたアカデミーは死んだ。その後、度々このアカデミーの初期の栄光をとりもどそうと様々な試みがあったが、成功には至らなかった。18、19世紀におけるアカデミーの変遷史についてはDomenico Caruttiの“Breve Storia dell'Accademia dei Lincei” (1883) に詳しい。それによると、ツェジの死後Cassiano Dal Pozzoの非常な努力にもかかわらず、ツェジの遺族たちは、アカデミーの費用を寄せてくれなくなった。約一世紀後1745年には、医者で博物学者であったPaolo Simone Bianchiの個人的努力で、アカデミーがRiminiに設けられたが、短命に終わった。聖堂院長 Scarpelliniの発議により数学物理学アカデミーの形で1795年再建、昔ながらの名称を許され、ナポレオンから年額2,500リラの基金を支給された。1830年の自由主義騒動の際グレゴリー16世によって断圧されたが、1838年にはPontificia Accademia dei Nuovi Linceiの名称のもとに復活、しかしそれも束の間で1840年には同じ法王によって断絶された。

最後に1847年、初めて自由憲法が制定された時、法王ピオ9世によりアカデミーは復活し、特許状が与えられた。そして、それは1875年統一イタリアの名のもとに、Quintino Sellaが最終的にアカデミーを再建した時まで通用したの

である。

### III

イタリアが統一されるまでの様々な政治上の変動がアカデミーに与えた影響は、これも様々であって、記すには複雑に過ぎる。最後に、イタリアの軍隊がローマに入城した日から12日目、1870年10月2日のアカデミーの会合で、新しい統一王国にアカデミーが帰属することが決定されたが、その日をRegia Accademia dei Linceiの始まった日だとする人もいる。しかし新しい国王との交渉が始まると、たちまち法王系の人たちが離脱しはじめた。会長のViale-Prelaは、もともと法王の侍医だったが、辞職し、新政権を認めない人々がこれになった。こうして新しいアカデミーとPontificia Accademiaが分離共存する形となった。1871年5月7日、新しいアカデミーは正式名称をRegia Accademia dei Linceiとすることが、公教育省によって定められた。この役所はまた教育者に対する賞を制度化した。Quintino Sellaが会長に選ばれたのが、1874年で、この会長のもとに、新制度は着々と整備された。1875年2月14日、新しい憲章が制定され、アカデミーはそれまでのローマ地区のアカデミーの立場から全イタリアのアカデミーに変わった。この年政府の補助金は9,000リラから20,000リラに値上げされ、さらに翌年には50,000リラになった。各々3,000リラの教育賞が2件設けられ、1878年には国王Humbert IIが各々10,000リラの賞2件を設けた（これはアカデミーが自然科学部と人文科学部に二分されていることによる）。1880年には、国王と王妃が臨席して授賞式が行われた。国のアカデミーへ

の補助はさらに年額 100,000 リラに増額された。

この頃までアカデミーの建物はキャピトールにあったが、Tommaso Corsini 公の申し出によって、Lungara にあったコルシニ宮の土地建物を 2,400,000 リラで買い上げるようになった。建物の中に納められていた、絵画の一大蒐集とさらに莫大な図書とを考えると、この値段は決して高いものではなかった。1885年の暮には、コルシニ宮におけるアカデミーの会合が始めて行われた。

これでめでたし、ということではなかったかという、そうではなく、更にもう一つの試験が第一次世界大戦の後に待っていた。ファシストの運動が、アカデミーを支える文化層にも影響を与えたのである。19世紀におけるヨーロッパ民族国家の国家主義的、植民地主義的繁栄の崩壊とそれにかわる新民主主義、ロシア革命、アメリカ合衆国の抬頭、第三世界の新興諸国家などに起因するヨーロッパの大変動は、様々な旧制度の危機を招来した。大変動を無事に生きのびた人々も癒されることのない心の偏手を負い、文化的伝統を引き継ぐべき若い人の層は破壊されてしまった。このように伝統が破壊されると、古い文化の価値はもはや受け継ぐべきものでなくなり、あらゆるものが、借りのものであり、過渡的なものであり、相対的なものに過ぎなくなる。イタリアの中で文化活動の中核であったアカデミーの生存には重大な危機が訪れた。その政治的独立性は、国家に属するべきものとして否定された。1926年1月7日の法令によって、Reale Accademia d'Italiaが制定され、自然人文の諸科学の分野でイタリアの文化を発達させ

るばかりでなく、「人種の純潔性を保ち、その天才と伝統を培い、さらに海外に普及発展させる」ことが求められた。

これは部分的にはリンツェイが従来やってきたことを否定することになる。

1929年イタリア国家と法王庁との間に話し合いが行われて、妥協の結果、二つのアカデミーが並存することとなった。Reale Accademia d'ItaliaとPontificia Accademia delle Scienzeとであるが、そのどちらからも、Linceiという言葉は脱け落ちているのである。同じ時代を生きてきた人間として痛感させられることは、社会の最高の精神的財産というものは、ただそれが政治から自由であるときにのみ生きながらえられるものだ、ということである。

ファシストの言い分がそう簡単に通ったわけではなく、様々な抵抗があった。たとえば、Vittorio Scialoja 会長は、その名声特に国際連盟で果たした国際的技量によって、アカデミーの寿命を数年延ばすのには成功した。しかしその死後、葬式が終わったか終わらないかのうちに、新しい会長の選挙の手続きがさし止められてしまった。そして政府から弁務官が派遣された。この弁務官は、実はVittorio Rossiというローマ大学のイタリア文学の教授で、長くリンツェイの会員だった人である。この人の使命は、アカデミーの憲章の条項を改めることにあり、そのことの意義と影響とを十分に心得ていた。薩では彼はリンツェイの墓を掘る積りはなかったと言っていた。彼はムッソリーニに会う機会を作り、純粋な統計的数字をならべて、アカデミー・ディ・リンツェイが学問の世界でどんなに重要な

役割を果たしているかを説いた。リンツェイを潰す話は、それでしばらくは延期となった。

しかし弁務官は二つのアカデミーの話し合いを進めるように命ぜられた。公教育省大臣のPietro Fedeleの提議で始まったのだが、うまく進まなかった。イタリア・アカデミーの方はどんな提案も受け付けなかった。そして1934年リンツェイも、国が認可したアカデミーは、すべて、国が決めた規制に従わなければならなくなった。会長も会員もアカデミーの現会員が出す3名の候補者の中から、政府が1人を選んで任命するというもので、これはアカデミーの従来の会員選定規則を全くひっくり返すものであった。

そして最後に1939年、法令によって二つのアカデミーは統合されることとなり、これは実際上、リンツェイの名が消え、リンツェイの方がイタリア・アカデミーに吸収されるという結果になったのである。

しかし、それも束の間、5年後の1944年9月28日、ファシスト政権崩壊後の法令によって、イタリア・アカデミーは消滅し、アカデミー・ディ・リンツェイは再びよみがえった。

#### IV

著者ラファエロ・モルゲン氏は、リンツェイの長い歴史の終りのところで、Orso Mario Corbino 教授（物理学者でEnrico Fermiを育てたので有名な人）が1934年6月3日のアカデミー集会で行った講演の一部を引用している。コルビノの講演の演題は「近代物理学の成果と展望」で、その中で、ジョリオ・キュリー夫妻が初めて発見し、後にフェルミが大仕掛けに研究

を行った人工放射能についての成果を紹介し、将来の原子エネルギーの時代を予想し、しかし「そのような恐るべきエネルギー源を支配できるようにになった人類の進歩が、人間の倫理の発展を遥かに追い抜いてしまっている」と警告したことを、記している。

この引用で著書は恐らくガリレオに匹敵する大天才フェルミの名前をリンツェイに結び付けて置きたかったのであろうと、私は推察する。しかし著者はもっと重大なことに注意していないように思われる。ガリレオの時代にリンツェイは決して幸福な状態にはなかったが、フェルミの時代にもリンツェイは、或いはフェルミ自身は決して幸福ではなかったというべきで、ノーベル賞を貰いにスウェーデンに行ったフェルミ夫妻はそのままファシスト・イタリアを逃れて、アメリカに亡命してしまったのであった。私には学問というものは、平穏な安定した社会環境の中では却って育ちにくいものであって、激動する社会の中でこそ真の飛躍をするのではないかという感じがする。コルシニ宮の見学をしながら、壁面に、ガリレオとならんで、フェルミの浮き彫りの像が掲げているのを眺めながら、私はそんなことを考えた。

付記。

- ① ボンチフィツィア・アカデミアの方は、現在もヴァチカンの中にある。昨1984年の秋、ここを訪れる機会があった。
- ② リンツェイの会員名簿（会員はもちろん終身）は故人の名も含んでいるが、その中に、田中耕太郎と湯川秀樹の名を見付けた。